

## CONTENTS

「意味と内容」が  
ひろがる学びの創造  
まなざしの共有によって

- 発刊にあたって「ゆく河の流れは絶えずして」校長 矢萩喜孝 …………… 1
- 学校提案「魅力と威力のある実践研究を！」（研究企画部）…………… 2・3
- 授業研究週間 要項 …………… 4
- 各教科部・複式部紹介 …………… 5・6・7
- わたしの学校 HOT LINE 研究会案内 …………… 8

## ゆく河の流れは絶えずして

和歌山大学教育学部附属小学校長 矢萩 喜孝



「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず……………」

この名文句からはじまる『方丈記』の中で鴨長明は、人生の無常、有為転変の世相を述べながら、この世のすべてのものは流転してやまない、と説いています。

これと符合するかのように、わが和歌山大学附属小学校は四月一日をもって、これまでの国立大学の附属校という立場から、「国立大学法人和歌山大学教育学部附属小学校」として再スタートいたしました。

しかしながら（正直なところ）わが校の教職員はこれまでにない、学校の「独立行政法人化」というまったく新しいシステムが始動するにあたって、文字どおり“ゆく河の流れ”を感じつつも、“もとの水にあらず”その渦の中へ身を浸すことへの不安、そして期待感に、皆の心が千々揺らいでいるのも事実なのです。

が、その一方でわたしは、「人間は教育されなければならない、唯一の被造物である（カント）」という言葉に強く惹かれるものがあります。

この意味するところは、子どもたちがただ単に、放埒で勝手気儘なものに墮することなく、「真の人間」としてかれらが成長するためにも、大人は子どもに対して日頃からしっかりと教育を施さなければならない、ということかもしれません。

さらに、わたしたちはこの言葉によって人間が人間として生きていくかぎり、「教育」そのものが間絶することなく永遠に続く、社会的営みであるということであらためて認識させられるのです。そしてそのことを思えば思うほど、どんな有為転変の世の中にあっても「教育」という、二文字に秘められた古今の人々の熱きおもいは、まさしく〈万古の真理〉であると理解することが出来ます。

ともあれ——、わたしたち教育者はもちろんのこと、これからも皆で、人間としての「生き方の本流」をしっかりと見据えながら（たとえ多少の過ちがあったとしても）“ゆく河の流れ”の流れ着く先が、けっして地の果てなどに落ちこんでしまうことのないよう、末永く見守っていくことが大切であると考えます。そしてなお、すべてにおいてそうした気配りや目配りがあってこそ、わたしたちは〈未来からの留学生〉である子どもたちの、良き水先案内人、あるいは良きパートナーとしての役割を果たし得るのではないのでしょうか。

本校教職員は、あくまでも〈まなびの主人公は子ども〉であることを今、あらためて自覚し、このたびの制度改革にもけっして怯むことなく、すべてに前向きに対峙していく覚悟であります。そしてなお、【ピンチはチャンス】であることを肝に銘じ、これからも新たな教育の「水脈」を探し求めながら、日々研鑽に励んでまいります。

みなさまの、さらなるご助言ご指導をお願い申し上げます。

## 魅力と威力のある実践研究を！

〔平成16年度研究主題〕

「意味と内容」がひろがる学びの創造  
——まなざしの共有によって——



研究企画長 愛須 一弘

「今の和歌山附小の研究は、学習文化などという、およそ“かたち”とは縁遠い、“かたち”にならないものを主題としている。学習文化を『学校が学習に挑む姿勢や雰囲気やさすもので、学校風土、学級風土といってもいいものである』と定義しているが、私はもっと漠然とした、それこそ常時教室に漂う学びの空気、その温度感や流れの速度なり、向き、あるいは澄みきり具合や重さといったものではないか、と感じている。それはとらえどころのない、文字通り“かたち”ではないものだが、その実、これほど子どもたちの学びの質を、恒常的かつ広範に決定づけるものはないだろう。」

これは、昨年11月に出版しました私たちの著書『未来を拓く「みらい」の学習』に対する奈須正裕氏（立教大）の推薦のことばです。まさにそのとおり、“文化”は人の精神的な価値の成果ですので、はっきりとその輪郭を捉えることは難しいものです。しかし、それは技術の発展を中心とする物質面の成果をいう“文明”と比較することによって、少なからず明らかになってきます。

文明は普遍となり私たちはその力に頼りながら自らの欲求を満たそうとします。これに対し、文化は独自のものであり自らの手で欲求を満たしていく様なのです。これを子どもたちの学びの空間にみると、すなわち日々の教室での子どもたちが醸す雰囲気に求めれば、そこにはまず主体的に学習をおしすすめている子どもたちの姿が必要となるのです。

ここ数年の研究では、子どもたちが、自分の、或いは自分たちの意志判断でおしすすめる学びの実現を可能にするものは何かを追究してきました。また、具体的な実践からは、それを支える子どもたちの自主性と自発性を感じることができるようになってきています。それは学校の教育構造そのものを見直すことによってできたのかもしれませんが。

しかし同時に、日々の授業のなかでほんとうに私たちは、一人一人の子どもの学びを的確にとらえ、またそれを生かしてそれぞれの成長が期待できる単元構成ができていだろうかという課題も浮かび上がってきました。

「個に応じる」——教育の世界では簡単につかってしまうことばです。たしかに私たちはその真の意味を考え、それぞれの子どもの能力だけではなく、性格、おかれている環境、その子の学ぶスタイル、その子の求めにまで応じ、具現する実践を展開していこうとしてきました。そこで最も大切なことは、何を願って単元構成をし、また子どもの学びのどこをどのようにみてきたのかということなのです。これを実践研究の着眼点として研究主題を設定しました。教育の原点に立ち返った“0からのスタート”といつてよいでしょう。

子どもたちの真の学びの姿は、その子なりの見方、考え方、感じ方をもって（追求によって立場をもって）、ねばり強く探究を続け（こだわりをもって追究し）、表現し、他者とのかかわりを持ち、試行錯誤を繰り返しながら自己を形成していく過程でこそ表出されてきます。ということは、子どもたちの“学ぼうとする力（対象に立ち向かって目標となる意味や内容を獲得し、さらにひろげていく力）”を先天的にとらえずに形成的・発達の的にとらえることが大切となることはいまでもありません。

また、真の学びの姿は、多様な考え方や能力をもつ集団のなかで、他者とのふれあい、共通の目標に向けて協力し合ったり、意見を交換し合ったりする場において見られます。そして、学ぶべき「意味と内容」は、普遍的な概念・価値・事実・法則、共通な規範との関連において存在しうると考えます。学びは、個人的な満足で終わってはなりません。普遍的に満足できる結論へと向かう必要があるのです。つまり、その普遍的な概念・価値・事実・法則、共通な規範の会得をめざしてこそ、子どもたちがはたらきかけるべき「意味と内容」に向き合えるのです。

私たちは、対象における一つの意味や見方、考え方を定義づけるときに、必ずといっていいほど発展する可能性をもたせています。それは、その学習を子ども自身が創ること、また創ったことを生かすことを願ってのことであり、さらに、創る意志や意欲、学び方まで高めようとしているのです。

創る意志や意欲を「創造性」と呼ぶのでしょうか。創造性の研究で著名な恩田彰氏は、『教育時報 第541号』（東京都教育研究会 1993年）のなかで、次のように述べています。

「創造性とは、新しい価値あるもの、またはアイデアを創り出す創造力とそれを基礎づける創造的人格である。その際『新しい』ということは、成人の場合は社会的文化的に新しい価値あるものを生み出す場合をいうが、子どもの場合、それも含まれるが本人にとって新しい価値あるものを生み出すという個人的な規準が重視される。」

ここからわかるように、子どもの創造性では、その所産もちろん大切ですが、それ以上にその過程も重視すべきなのです。

では、子どもたちの学ぶ過程を大切にし、その創造性を引き出し、育てていくために、何をすればよいのでしょうか。一言でいうと、私たち自身の単元構成力を高めるということになります。常々、私たちは、子どもたちのために、また自身のために授業力をつけたいと思いながら実践しています。授業力をつけることは、単元構成力を高めることにほかなりません。つまりそれは、子どもたちが、学習対象にはたらきかけ、主体的に意味と内容をひろげていける単元づくりのことであり、そこでの学びの姿を的確にみとる力のことでもあるのです。

的確なみとりの第一歩は、私たちが子どものまなざしを共有することなのです。“まなざし”とは、子どもの表情であり、内面の表れであり、個性的な表現です。そして、共有するとは、意思交流と一体感をもつことを指します。

私たちが子どものまなざしを共有することによって、子どもたちは、より素直に自分の思いや考えを表出し、私たちは、またそこから子どもの感じ方・思い方・考え方・行い方をとらえ、授業に生かしていきます。まなざしの共有によって構成された単元には、私たちが力任せに教える授業はありません。そこにあるのは、子どもの学びが成立する授業です。子どもが学びが成立する授業とは、子ども自身に問いが芽生え、或いは、子どもが主体的に問いを引き寄せ、その問いにはたらきかけ、解決していくなかで、新たな意味や内容を獲得していく授業なのです。

子どものまなざしを共有していくというのは、単なる技術上のことではありません。教師としての基本的な教育姿勢の問題なのです。子どもが育つということをどのような視点に立って考えていくかという問題なのです。「意味と内容」を自らの力でひろげ、自らの学びを自らの手で創造していく姿を確かにとらえ、子どものさらなる成長を願うのです。

はじめの一步が魅力と威力のある実践研究により確かな足跡となっていくでしょう。

## 新設・授業研究週間～いま附属小が変わる!!

教科学習の原点に立ち返る!

～「意味と内容」がひろがる学びの創造～

《3日間で、8教科&「みらい」・16授業の公開&研究協議》

### 6月14日(月) 4授業&3協議

研究授業Ⅰ (13:40-14:25)	研究授業Ⅱ (14:35-15:20)	協議会 (15:30-17:00)
<b>社会</b> (4年A組) 「住みよいくらしをささえる」 ～水はどこから～ 授業者: 片桐 宏	<b>社会</b> (6年B組) 「いざ鎌倉!!」 授業者: 田中 いずみ	社会科 (6B教室) 【指導助言】 片桐 清司 (前 有功東小学校校長)
<b>図工</b> (2年A組) 「おきにいり あつめて」 授業者: 竹中 恵美子	<b>音楽</b> (6年C組、第1音楽室) 「見る・聴く・愛する」 ～エーデルワイス～ 授業者: 江田 司	図工科 (2A教室) 【指導助言】 堀 憲子 (小倉小学校校長) 永守 基樹 (和歌山大学) 音楽科 (第1音楽室) 【指導助言】 長田 浩子 (貴志南小学校校長) 嶋田 由美 (和歌山大学)

### 6月15日(火) 4授業&2協議

研究授業Ⅰ (13:40-14:25)	研究授業Ⅱ (14:35-15:20)	協議会 (15:30-17:00)
<b>算数</b> (1年A組) 「たしざん(1)」 授業者: 池田 彦男	<b>算数</b> (4年B組) 「こちらが変われば あちらも変わる...?」 授業者: 梅本 優子	算数科 (4B教室) 【指導助言】 佐藤 昌吾 (橋本市教育委員会指導主事)
<b>理科</b> (3年B組) 「生きものたんけんたい」 ～むしむしワールド～ 授業者: 中筋 美恵	<b>理科</b> (6年A組) 「ヒトや動物の体」 授業者: 不野 和哉	理科 (6A教室) 【指導助言】 中原 徹 (松江小学校校長) 宮永 健史 (和歌山大学)

### 6月18日(金) 4授業&3協議

研究授業Ⅰ (13:40-14:25)	研究授業Ⅱ (14:35-15:20)	協議会 (15:30-17:00)
<b>国語</b> (2年B組) 『スイミー』 ～音と一緒に楽しく読もう～ 授業者: 須佐 宏	<b>国語</b> (3年C組) 「つり橋わたれ」 ～ファンタジーの世界へ!～ 授業者: 竹光 眞佐人	国語科 (3C教室) 【指導助言】 武西 良和 (有功東小学校校長)
<b>体育</b> (5年B組、運動場) 「バスケットボール」 授業者: 石本 倫章	<b>家庭</b> (5年A組) 「食について考えよう!」 授業者: 藤原 ゆうこ	家庭科 (5A教室) 【指導助言】 坂本 記美子 (雄湊小学校校長) 体育科 (5B教室) 【指導助言】 三上 滋樹 (今福小学校校長)

### ◆【複式授業研究会】6月18日(金) 午前: 4授業、午後: 協議会 (詳細は別紙要項)

「みらい」(1・2F)	理科(3・4F)	国語(3・4F)	算数(5・6F)
のりもの たんけんたい ～駅をとり上げて～ 授業者: 松尾 浩一	『大きくなあ～れ!』 ～植物の体と成長～ 授業者: 辻本 和孝	3年: おもしろいな! いろんな国のお話 ～「三年とうげ」 4年: すてきだな! あまんきみこさんのお話 ～「白いぼうし」 授業者: 西村 充司	変わり方 5年: 変わり方のきまり 6年: 変わり方を調べて 授業者: 岡田 明彦

## 国語科

### 比較を通して、楽しく学び合い、伝え合う力を高める

本校国語科では、伝え合う力を高めることを最終の目標とし、そのための方法をいろいろと模索してきました。研究過程で、伝え合いの質を高めるためには、認識力を高めることが不可欠であり、認識力を高めるための研究を行うことで、伝え合う力が高められるという考えに至りました。

そこで、私たちは、自分の考えを作る過程や伝え合う過程で、「比較」を意識させることにより、どんな場面でも自分の中での比較や自分と相手との考えの比較を行っていくのではないかと考えました。また、そうして比較することにより、より深い認識力が育ち、深い読みが実現できるのではないかと考えました。深い読みが実現することで、本来読みきれなかった読みの楽しさを味わうことができると考えたのです。また、それは、読書の世界を広げる可能性も秘めています。そうすれば、認識力の高まりが、より深い比較を行える力となっていきます。それぞれの力がスパイラル的に高まっていくと考えたのです。

このように国語科では、言葉にこだわり比較を意識させることで、教材とじっくり向かい合い相手の考えをじっくり聞き、お互いの意見交換をより質の高いものにしていこうと考えています。そうして、お互いの読み取りのよい点悪い点を指摘し合いながら、より深く物事を認識していき、質の高い伝え合いのできる学級集団を創りあげていきたいと考えています。



(写真左から竹光、沖、志場、須佐)

## 社会科部

### 追究し続ける子どもを育てるひとり学習の充実 ～全体学習を支えるひとり学習のあり方～

“ネタ！ネタ！ネタ！ネタはないかなあ～。  
社会はネタが勝負！回転寿司のように新鮮で  
活きの良いネタが次々に出てこないかなあ。  
今日もネタ探しに奮闘中のメンバーです。”



(辻本郁夫)

北島健司  
副校長

田中いずみ

片桐 宏

山崎立也

今年も、昨年度に引き続き、全体学習を充実させるための授業研究を行います。私達は、社会の問題を自分にかかわりのあるものとして受け止め追究していくための学習を進めていくことが大事だと考えています。全体学習は考えを練りあう場であり、ひとり学習を発展させる場があります。全体学習はひとり学習のためにあり、ひとり学習は全体学習のためにあると考えます。

そんな願いを持ちながら、子どもたちと共に楽しく厳しく学習していきたいと思っています。がんばります！

## 算数科部

### 研究テーマ

子どもがつなげる算数科学習  
～ 思考の相互作用によって ～

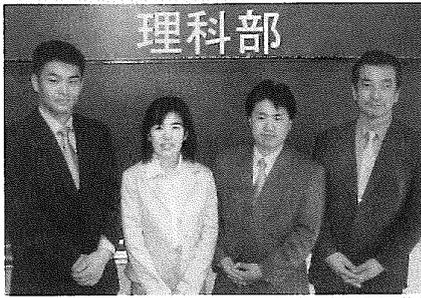
- ・子どもとそのまなざしを共有するため、受容的な姿勢で授業に臨む
- ・一人ひとりの子どもが楽しみながら、問題を追求していける学習材の開発と工夫
- ・子ども自身で学習をつなげられる単元構成

3人のパワーを結集して、日々子どもたちと算数を“愉しんでいます”。ぜひ、授業を観にきてください。

共に算数を語りましょう♪  
(語りすぎで口内炎だらけ…)



愛須 一弘 橋本 優子 池田 彦男



(中井章博)(中筋美恵)(辻本和孝)(不野和哉)  
「私たちは理科大好き！」

本年度の理科部のテーマ

「感動」体験を通して、主体的に  
学習する子どもを育てる理科学習

理科部の考える感動とは……

「なぜ」「どうして」「ふしぎだ」「解決したい」  
「調べたい」「うまくいったぞ」「やっとできた」  
などの心の動きをさします。

私たち教師も感動する場面が少なくなってきた  
現在、子どもたちといっしょに感動する場面をつ  
くっていきたくて考えています。具体的には、「は  
じめの感動」「課題追求の感動」「追求の結果の感動」と3つの場面をつくりあげたいと  
考えています。そして、身の回りにある自然に興味を持ち、ふしぎだと感じる【科学の目】  
を養ってきたいと思います。

「理科大好き！」という子どもたちでいっぱい为学校を目指しています！

## 音楽科

「見る・聴く・愛する」力を育てる！

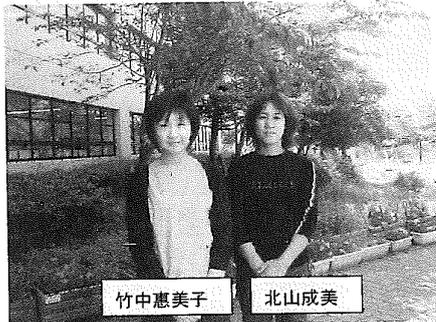
“音”を通して、直接子どもたちに働きかけるのが  
音楽科の特長です。昨年度より、「鑑賞指導の充実を通  
して、『見る・聴く・愛する』力を子どもに育てる」を  
テーマに、将来に生きる音楽の基礎的・基本的な力の  
定着をめざしています。また、実践研究における大学  
との密接な連携はもとより、子どもの育ちを中心に見  
据えた中学校との連携を探っていく一年としたいと考  
えています。研究の成果は、子どもの育ちで勝負することをめざします。



土橋由美 江田 司 浦 幸

## 図工科部

自分らしいよさや可能性を発揮し、つくり出す喜びを味わう子  
～「もっと……」「次は……」子どもの表現意欲が高まる学習



竹中恵美子

北山成美

今年はメンバーが新しくなりました。  
フレッシュな新人2人ですが、新しい風を吹  
き込みたいと思っています。  
子どもたちが自分の思いや願いを絵や形に  
することにより、根源的な表現の欲求を満足し、  
表現の喜びを味わえるような支援や、魅力的  
な題材を提供できるようにがんばりたいと思っ  
ています。

## 〔家庭科〕

～よりよい生活を考える～



藤原 ゆうこ

5年生からスタートする家庭科。子どもたちにとって、当たり前のように日々過ごしている自分の家庭生活を見つめ直す機会でもあります。自分の生活をじっくり見つめ、話し合い、考えていく中で、身の回りにあるいろいろな工夫に気づき、さらに「自分たちにできること」について考えていける学習をおこなっていきます。

子どもたちが日常生活で実践できそうに感じられる、「やった、できた」と満足感を得られる、そんな教材を取り入れていきたいと思います。

## 体育科



石本

「わたし」と「運動」の関係を創る ～ よりよく「競争」をたのしむために～  
学校の学習の中で子どもに人気のあるものは、総合的な学習や他の教科よりも「体育」ではないでしょうか？それは、唯一、体や心を開放させ、リラックス感や爽快感を味わえる学習だからです。また、体育科は「競争」を学習の目的にしている教科でもあります。「競争」は人間（子ども）を成長させる大きなエネルギーになりますが、野蛮にさせたり、劣等感を味わったりとマイナスベクトルが向くこともあります。

今年は、子どもたちと“よりよい「競争」”を探っていきます。そして、それが自分（たち）の成長にとって大切なものだという実感がもてる学習を展開していきたいと考えています。

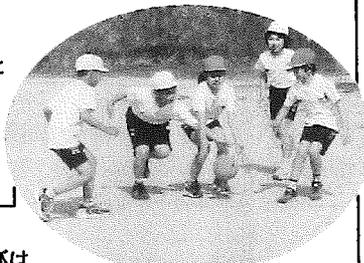
### 6月の授業について 「バスケットボール」

高学年に適した「学級開き単元」はボール運動であろう。「学級開き単元」というあまり聞きなれない言葉であるが、これのもつ意味は大きいと考えている。

今、時間時数が削減されているので、1つの単元をたくさん学習させることは難しくなっている。しかし……。

バスケット (3)	他の単元 (7)	バスケット (6)
-----------	----------	-----------

上図のような学習過程にすれば、他の学習をしているときの子どもの遊びはどのようになるだろう？



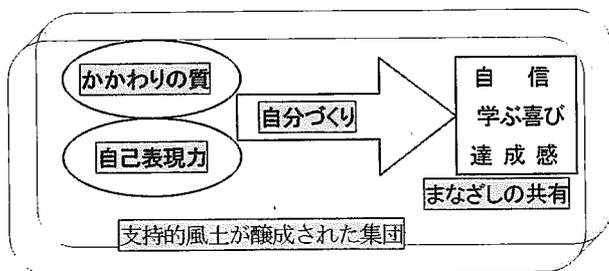
「バスケットボール」

## 複式部

### 研究テーマ

自ら問題意識を持ち、かかわりを深めながら学び合う子どもの育成  
～一人一人を大切に、学ぶ喜びを実感する授業づくり～

複式部では、かかわりの質を高めることと自己表現力をつけることをもとにして、個に応じた自分づくりをめざします。そのことが、自信や学ぶ喜びに繋がっていくと考えています。



3.4F 西村充司



1.2F 松尾浩一



5.6F 岡田明彦

平成16年度 教育研究発表会 平成16年11月19日(金) **決定**

複式授業研究会

研究主題 自ら問題意識をもち、『かかわり』を深めながら、学び合う子どもの育成  
一人一人を大切にし、学ぶ喜びを実感する授業づくり

日時 平成16年6月18日(金) 10:20~15:30

日程

10:20	10:40	11:25	11:40	12:25	13:45	15:30
受付	研究授業Ⅰ	移動	研究授業Ⅱ	昼食	研究協議会(全体会・分科会)	

研究授業Ⅰ(1・2F:松尾浩一、3・4F:辻本和孝) Ⅱ(3・4F:西村充司、5・6F:岡田明彦)  
(みらい) (理科) (国語) (算数)

平成15・16年度 和歌山県国語力向上モデル事業  
国語教育推進校指定研究発表会

研究主題 「比較を通して、楽しく読み味わい、伝え合う力を高める」

日時 平成16年6月24日(木) 10:50~16:40

会場 本校

日程

10:20	10:50	11:35	11:40	12:25	13:30	15:00	16:30	16:40
受付	研究授業Ⅰ	移動	研究授業Ⅱ	昼食	開会・研究報告・協議会等	講演	閉会	

講師 奈良教育大学教育学部 教授 松川 利広 先生  
研究授業Ⅰ(2B:須佐 宏、5C:沖 香寿美) Ⅱ(3C:竹光眞佐人、6C:志場俊之)

研究STAFF

校長 矢萩 喜孝	副校長 北島 健司	教頭 貴志 年秀
1 A 池田 彦男	1 B 北山 成美	1 C 辻本 郁夫
2 A 竹中 恵美子	2 B 須佐 宏	2 C 土橋 由美
3 A 山崎 立也	3 B 中筋 美恵	3 C 竹光 眞佐人
4 A 片桐 宏	4 B 梅本 優子	4 C 中井 章博
5 A 藤原 ゆうこ	5 B 石本 倫章	5 C 沖 香寿美
6 A 不野 和哉	6 B 田中いずみ	6 C 志場 俊之
1・2F 松尾 浩一	3・4F 西村 充司	5・6F 岡田 明彦
音楽専科 江田 司	算数専科 愛須 一弘	理科専科 辻本 和孝
養護 上柏 薫		
講師 浦 聿	佐原 ちづよ	重黒木 弘子
藤田 裕子	前川 泰子	Hashizume Bryce
		川上 友希
		Kercheval Jesse Winston

From Editors

4年目に突入した「らいぶ・創りえいたー」。  
「生き生きと本物を創り出すひと」という意味  
を込めています。ご意見・ご感想をお寄せ下  
されば幸いです。

和歌山大学教育学部附属小学校

〒640-8137 和歌山市吹上1丁目4番1号  
TEL (073) 422-6105 FAX (073) 436-6470  
URL <http://www.aes.wakayama-u.ac.jp>  
E-mail [fuzoku@center.wakayama-u.ac.jp](mailto:fuzoku@center.wakayama-u.ac.jp)